

Title	モンゴル国内突厥ウイグル時代遺蹟・碑文調査簡報
Author(s)	森安, 孝夫; 吉田, 豊
Citation	内陸アジア言語の研究. 13 p.129-p.170
Issue Date	1998-09
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/16464">https://hdl.handle.net/11094/16464</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# モンゴル国内突厥ウイグル時代 遺蹟・碑文調査簡報

森 安 孝 夫・吉 田 豊

本報告は、平成8(1996)年度より3年間の予定で文部省科学研究費を受けている国際学術研究「突厥・ウイグル・モンゴル帝国時代の碑文及び遺蹟に関する歴史学・文献学的調査」(代表者：森安孝夫)の2年目(1997年度)の「行動記録」からの抜粋を基礎にしている。本調査・研究のフィールドであるモンゴル国のカウンターパートはモンゴル科学アカデミーであり、日本側が全費用を負担して行なわれるこの調査・研究に対し、モンゴル側は「ビチェス=プロジェクト」という名称を与えて共同研究の態勢をとっている。もとの「行動記録」(森安担当)はかなり詳細なものであるが、ここでは特に本誌の性格に鑑み、言語資料である碑文と、碑文のあった重要遺蹟に関係する部分を抽出し、それに森安と吉田が帰国後に得た碑文の新しい「読み」やアイディアを追加している。

調査対象となった碑文はいずれもモンゴル国にあるもので、すべて既にテキストが発表されているが、研究者の間で読み方の違うところや明らかな読み誤り、さらには不明な箇所が多々あって、原碑文を実際に見ることは我々の長年の悲願であった。拓本をとった碑文全体の正式の報告書の出版までにはなお多くの歳月を要すると思われる。しかしこれまでに判明したところだけでも文献学者・歴史学者双方に有益であり、且つまた碑文と関わる遺蹟の景観を知ることとは碑文の解釈にとっても重要であると思われるので、とりあえずここに簡報として発表する次第である。

1997年8月16日(土) 大阪→ウランバートル

森安・吉田・片山章雄・大澤孝の4名が関西国際空港より午後3時発のモンゴル航空904便でウランバートルへ。昨年持参した拓本道具とトランシーバー器

具への補充品、大型の拓本用筒型ケース、GPS 2台、カメラ、大量の乾電池、携帯食料などを運ぶため、手荷物超過重量は99kgに達した。

午後7時12分、ウランバートルへ定時に到着。晴れている。気温摂氏17度。夏季は日本との時差なし。我々のカウンターパートであるモンゴル科学アカデミー歴史研究所のオチル（А. Очир）所長とバツトルガ（Ц. Баттулга、歴史研究所研究員）、それに通訳のバツトジャルガル（Э. Батжаргал）らの出迎えを受け、宿舎のフラワー=ホテルへ。そこで先発していた林俊雄と合流。

## 8月17日（日） ウランバートル

午前10時、日本側メンバーはホテルの吉田の部屋でミーティング。午後に予定されているモンゴル側との合同ミーティングに向け、意見交換とルート変更点などの確認。

午後1時40分、日本側が歴史研究所に向く。オチル所長の出迎えあり。所長室に案内され、さっそく合同ミーティング。今回の日本モンゴル合同の調査・研究の費用として文部省科学研究費（国際学術研究）その他より3万ドルを手渡す。前年度の経験から3000ドルを計上していたヘリコプターのチャーター料について、今年は1時間550～600ドルだが、ウランバートルから空中撮影予定地までの往復だけで4時間以上かかるとのこと。実質的には目的地で2時間くらいしか使えそうにないと覚悟。

モンゴル側からは、6月にバツトルガがトニユクク碑文の拓本をとったがそれほどよい出来ではないこと、7月にボルド（Л. Болд、モンゴル科学アカデミー言語文学研究所言語部長）とバツトルガの両名が来年度から始まるトルコ共和国隊のホショー=ツァイダム諸遺蹟の発掘のための予備的測量調査に参加したこと、さらに7月にオチル・バツトルガ両名がオブス県（Аймак）のウランコム市へ行き、市の博物館にある2つの碑文（1点はウイグル文、もう1点はルーン文）の拓本を2セット取ってきたとの報告があった。1950年代にドルジスレンによって発見され、シチュエルバックによって紹介されて以来、いくつもの研

究のある「ウイグル文字」のウランコム（カラウス）碑文の方は有名である（cf. A.M. Shcherbak, “Notes on the Inscription at Ulaangom,” in: *Laut- und Wortgeschichte der Türk-sprachen, Turcologica* 26, 1995, pp.145-150）が，ルーン文字碑の存在は今回初めて認識した。ただし両碑文は近くから出土したが，同じ遺蹟に属していたわけではないという。さっそくこれら2点の碑文の拓本を見せてもらった。しばらく皆で眺めていたが，吉田はこの「ウイグル文字」はやはりウイグル文字であって，ソグド文字ではないという。R字にフックの付いたL字の存在や，語末のM字の形などからの判断であるが，この点のはかつて森安が1985年の論文（「チベット文字で書かれたウイグル文仏教理問答（P.t.1292）の研究」『大阪大学文学部紀要』25, pp.39-40）で言及した通りである。「千」を表わす語としては *biŋ* / *bīŋ* ではなく，より新しい形の *miŋ* が使用されているが，これは時代判定のメルクマールのひとつとなる。ウイグル文字碑冒頭の *är atīm* 「成人としての私の名」と同じ表現が，ルーン文字碑文の方にもあることに気付いたのは収穫であった。

## 8月18日（月） ウランバートル

午前10時，ジープで歴史研究所へ。オチル，ボルド，バツルガ3名のほか初対面のバヤル（Д. Баяр，歴史研究所上級研究員）も加わり，合同ミーティング。初年度ほどではないが，緊張感が高まってくる。

午後は調査旅行の準備，足りない物の買い出し，その他を行なう。

## 8月19日（火） ウランバートル→ボルガン

午前9時頃，フラワー＝ホテル前の広場にロシア製ジープ4台，トラック1台と総勢17名の隊員のうちコック以外の全員が集合。

ホテル前で，日本より持参したアメリカ製のGPSで経緯度の測定，北緯47度55分27秒，東経106度56分17秒。ただしアメリカ国防総省の指令でこのGPSの精度は厳密ではないので，秒の単位は参考程度にしかない。森安・吉田・大澤が保持する3つの高度計を1300mに合わせ，以後補正しないように申し合わ

せる。高度計は気圧式なので、天候に左右される。この時の天気は快晴。

9時35分出発。

午後3時41分、トール(トラ)河畔に到着し、遅い昼食の準備。北緯48度13分54秒、東経104度19分44秒。高度計で970m(晴れ)。気温31度。白石典之よりの教示によれば、カラコルム付近で、東経は1度 $\div$ 78km, 1分 $\div$ 1.3km, 1秒 $\div$ 22m, 北緯は1度 $\div$ 115km, 1分 $\div$ 1.9km, 1秒 $\div$ 32m。

9時過ぎ、ボルガン市のホテルに到着。高度計1195m(晴れ)。

## 8月20日(水) ボルガン→ホタグ

午前10時21分、出発。

午後4時24分、セレンゲ河にかかる大橋を渡る。水流の幅100m以上。少し濁っている。渡ってすぐ停車し、川中島にある石人を見にいくことになる。

5時47分、ホタグの町に入る。ここから目的のバイバリク城遺蹟までは10 km 余りらしい。夕方一時雨、その後強風が吹く。

## 8月21日(木) ホタグ→ビーブラク→ホタグ

午前10時05分、8世紀の東ウイグル可汗国第2代の葛勒可汗(磨延啜)の紀功碑であるシネウス碑文に、ソグド人と漢人に命じて、あるいはソグド人と漢人のために造営させたと記録されているバイバリク城遺蹟をめざして出発。

10時28分、バイバリク城に到着。四角い土塁に囲まれた遺蹟は複数あって、どれが本来のバイバリク城かわからないので、とりあえず、最も城壁の保存状態が良く、現地の人がビーブラクと呼んでいるものを、それと認定する。それは予想よりはるかに大きい。一辺が250mくらいはありそう。基礎の土塁の上はかなりよく残っている版築の城壁の高さは5m位はある。なぜこれだけの規模の遺蹟が、これまで写真1枚さえ発表されなかったのか不思議。

まず、ビーブラク城の残存している城壁の計測、遺蹟の表面探索、細部の写真撮影などを行なった。それから城内の住人にインタビューを試みる。現在、

城内にはかつて何かの重要建築物があったとおぼしき基壇(高さは1m強)の上に、ビーブラクという名の仏教寺院が建っている。その前には素朴な作りで古そうに思われる前足を立てた石獅子1対と、伏せた形の石獅子1体とが置かれている。いずれも石材は玄武岩と思われる。林・大澤によれば、後者の形は西方のセルジューク朝やオスマン朝の獅子像によく似ているという。本日は僧侶がおらず、27歳の番人夫婦のみがいた。この寺院は、かつてあった同名の寺院を1990年に再建したもののといい、傍らに1938年に коммунистが寺院を破壊したことを伝える看板も掲示されている。

昼食後、2時半より活動再開。オチルと森安は、数km離れたゲルにいるというビーブラク寺の僧侶を探しに行く。2時50分、目的のゲルに到着すると、たまたま5人の年配の男性が集まって酒を酌み交わしていた。最年長はドルジスレン(Доржсүрэн)という名の83歳の老僧。8歳の時にビーブラク寺のシャビ(沙弥)になったという。次はこのゲルの主人で、名はブルヴェードルジ(Пурвээдорж), 58歳でやはりビーブラク寺の僧侶。この2人を中心に聞き取り調査をする。先ほどの看板には遺蹟にちなむ寺院名をビーボロク(Бий-Болог)と表記してあったので、5人に確認すると、祖父から代々伝えられた遺蹟名としてはビーブラク(Бий-Булаг)が正しいとの答え。これはペルレー(Х. Пэрлээ, Монгол Ард Улсын эрт, дундад үеийн хот сууринь товчоон, Улаанбаатар 1961, p.51)の記載と一致する。ビーブラク(Бий-Булаг)が8~9世紀の東ウイグル可汗国時代の城名バイバリク(Bay-Balīq「富貴城」)の転訛であるという従来の説にまちがいはなかろう。この城壁遺蹟内には今世紀はじめに9棟の建物があり、全てビーブラク寺に属していた。いつの建築かは知らないが、いずれも瓦葺きでレンガ造りだったという。多分清代のものだろう。また城内には住居としてのゲルと木製家屋があり、全部で300人以上の僧侶が住んでいたという。1935年(先ほどの看板では1938年)にこの寺院は破壊されたが、ソ連のペレストロイカ後の1990年に再建が始まり、1991年より宗教活動が再開された。現在いる僧侶は8~9人で、ドルジスレンが最長老、ブルヴェードルジが2番目。あとは28歳、19歳な

どの若者。寺院前に置いてある1対の石獅子 [Пэрлээ 1961, p.52 では雌雄2体というが、阿吽相の2体とみるべきであろう]と、伏せた形の石獅子1体は、もともとは遺蹟の西北にあるアルスラン=トルゴイという丘の上にあったものだという。

4時、オチルと森安は、僧侶たちの記念写真を撮った後、ゲルを辞す。このゲルは山麓近くにあり、高度計で1065mのところだった。

4時15分、先ほど教えてもらったアルスラン=トルゴイと呼ばれる丘に上がってみる。高さは10mくらい、幅約100m、そして長さは車のメーターで500mあった細長い丘。アルスラン=トルゴイの端よりビーブラク城の西北角まで車のメーターで計ったところほぼ1km。

昼食後、森安以外の日本側メンバーは、林のリードで簡単な測量を実施。メインの遺蹟は一辺が240m弱のほぼ正方形。デジタル=メジャーによる計測では、北・西・南面がいずれも238m、東面だけは234mだった。高さ2~3mの土塁で囲まれている。東面と北面では、その上に、高さ5m前後の版築による城壁が残っている。土塁の土台の上に版築の城壁がある構造は同じウイグル時代のカラ=バルガスン宮城と同じであり、カラ=バルガスンでもオルホン河に近い東壁の版築部の残り方がもっとも悪い。メインの遺蹟の南750mの地点には、一辺が140m前後の別の四角い土塁がある。

7時15分、帰路につく。7時34分、ホタグのホテルに到着。帰路にバイバリクからホテルまでを車のメーターで計ったところ、2号車でも4号車でも11kmだった。

[本年度の調査後に初めてこの地区の航空写真に接することができた。それには我々がメインの遺蹟とみた保存状態の良い城郭の西方に、さらに大きな規模の遺蹟が不鮮明ながら写っていた。そのため1998年5月にバヤル、白石典之、バットルガが再度ここを訪れて調査した結果、確かにそれは一辺330mもあるウイグル時代の四角い城壁であることが判明した。さらにプルヴェードルジへの再度のインタビューの結果、3体の石獅子が元々あった場所も、アルスラン=トルゴイではなく、アルスラン=ウードと呼ばれるこの第3城の東壁の上だったと

のこと。本来のバイバリクは複数の城郭から成る都市であった可能性が高くなった。]

## 8月22日(金) ホタグ→ハイルハン

午後5時32分、ハイルハンに到着。

夕食後、合同ミーティング。これからの3日間、シネウスに2日、シヴェート=オラーンに1日かけることを再確認。シネウス碑文のテキスト作成に関しては、日本側・モンゴル側双方のこれまでの進捗状況を説明しあう。さらに日本側からは、石自体に破損があるため去年とった拓本ではよく読めなかったが、ラムシュテットがその解説論文(G.J. Ramstedt, "Zwei uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei," *JSFOu* 30-3, 1913)でテキストをおこしている箇所について、再度拓本をとる必要があることを説明。いっそのこと全体をもう一度採拓してはどうかと森安が提案し、承認された。

## 8月23日(土) ハイルハン→シヴェート=オラーン→ハイルハン

今朝は雨なので、まずシヴェート=オラーンに行くことにする。

午前10時、全員重装備をして出発。フヌイ河とハヌイ河の合流地点まで来たが、水量が多くて渡れそうにない。近くのゲルで渡河地点を尋ねながら、ようやくシヴェート=オラーン遺蹟のある丘の上にたどりつく。雨はやまず、風も強く、きわめて寒い。まずみんな車から降りて、遺蹟を一回りする。頂上には大きな積石塚がある。今は盗掘で掘り返されていて円形に見えるが、林によると、もとは一辺が30~40mの方形だったらしい。高さは4~5m。積石は角張った不規則な石や扁平な石で、赤っぽいものが目立つ。その大きさはこぶし大から50cmくらいまで様々だが、20~30cmのものが多い。この丘はフヌイ河がハヌイ河に注ぐ合流点のすぐ北側にそびえ立っている。丘は馬の背のような形をしており、高さ60~80mくらい。溶岩でできており、上に薄く表土が載っていて、草原をなしている。



かつて、かの有名なタムガ(元来は家畜の所有印、転じて紋章や印章の意味にもなる)だけの碑石が立っていたと推測される礎石(亀趺ではない)は、頂上の積石塚より東にあり、その中間に石人・石獅子・石羊がある。これらの彫像の石は灰褐色で、花崗岩ではなく、玄武岩らしい。大きな長方形の礎石は簡単に動かせるものではなく、元の位置と考えられる。碑石を支えていたはずのホゾ穴は、縦横 22×55~56cm、深さ24~25cm。石人・石獅子・石羊は明らかに元の位置ではないが、このコンプレックス全体は東向きだったと考えてよからう。

片山はバヤルのチョークを借りて、石獅子の側面にある山羊形のタムガを浮き上がらせた。ただし、それについては既に指摘があり、写真も発表されている。これによってこの遺蹟がもともと突厥の阿史那氏ゆかりのものであったことは確実と思われるが、ラムシュテットの没後にアールトによって公刊された報告(P. Aalto, "G.J. Ramstedt's archäologische Aufzeichnungen und Itinerarkarten aus der Mongolei vom Jahre 1912," *JSFOu* 67-2, 1966, pp.4, 8)によれば、「ウイグル」・「可汗」という語を含むルーン文字銘があったらしいので、注意が必要。ラムシュテットはこの遺蹟を、突厥ではなくウイグルのものと考えていた。積石塚のみに着目すれば、確かにシネウス遺蹟とよく似ていてその方が理解しやすいが、逆に突厥王族の象徴である山羊形タムガの説明がつかなくなる。

午後4時半、ハイルハンに戻り、ガンデン寺を訪問。ここには、シヴェート=オラーンから持ってきた、例のタムガだらけの碑石があり、五体投地用の板として再利用されている。上端はカマボコ型で、なんの模様もない。下端にはホゾがわずかに残っていて、本来のホゾの幅は55~60cmくらいと推定され、シヴェート=オラーン遺蹟にあった礎石のホゾ穴の大きさと矛盾しない。全体は縦224cm、横幅は上方で80cm、下方で84cm、上方の厚さは22cm。玄武岩らしい。五体投地用に使われているため、表面のタムガはかなりすり減っている。オチルの交渉で、僧侶からタムガの拓本をとってもよいという許可がもらえたので、ジープの運転手に宿舎まで拓本道具をとりに行ってもらい、今年最初の採拓を行なう。タンポの墨ののりなどいまひとつだが、結構うまくいった。た

だし1枚しかとらなかったで、日本には持ち出せない。

7時15分、宿舎に帰着。

## 8月24日(日) ハイルハン→シネウス→ハイルハン

午前10時57分、シネウス遺蹟に到着。森安の高度計で1480m(晴れ)。こちらの中心部の積石塚は、シヴェート=オラーンのそれより小さいが、一つ一つの石は逆にこちらの方に大きいのが目立つ。森安とバツトルガは採拓中の墨入れ前の状態で、テキストのチェック作業。既に去年とった拓本で、ラムシュテットの読み誤りを訂正した箇所を再確認とか、去年の拓本では見えなかったが、ラムシュテットは正しく読んでいた箇所を今回は確認できたなどという小さな成果がいくつもあった。採拓できたのは大小断片とも3面ずつ。森安とバツトルガのチェックが済んだのも、大断片の北・東面と小断片の北・東・南面のみ。あとは翌日にもちこす。

午後7時過ぎ、日没が近付いたので作業中止。斜めの夕陽を利用した写真とビデオの撮影にとりかかる。碑石が非常に重いので、ころがすのが大変。運転手も全員手伝う。ボジの写真は林、ビデオは森安とバツトルガが撮影。全て済んだのは、日没寸前の8時57分だった。

### <シネウス碑文の読みについて・・・森安担当>

シネウス・タリアト両碑文には、突厥・ウイグルの本拠地として有名なオテュケン地方と並んで、もう一つ別の地方名が現われる。シネウス碑文北面第2行目(N2)に見えるそれは、ラムシュテット以来 *täg(i)räs(i)* と読まれてきたもので、対応する表現を持つタリアト碑文が学界に初めて紹介された時も、その紹介者のシネフーはその語を同様に読み、T. テキンもこれに従った。さらに1974~1975年にシネウス碑文を実際に調査したクリヤシュトルヌイはこの語を *tägräsi* と読むだけでなく、ラムシュテットが不明とした部分を含め全体を *ötükän eli tägräsi eli ekinti olurmiş* と修正し、タリアト碑文 E3 の対応箇所についても *ötükän eli tägräsi eli ekinti (and not ekin ara)* としている (cf. S.G. Klyashtorny, "The Tes

Inscription of the Uighur Bögü Qaghan," *AOH* 39-1, 1985, pp.148-149). しかしながら我々が現地にあるシネウス碑文とウランバートルの歴史研究所に保管されるタリят碑文とを精査したところでは、明らかに *tägräsi* ではなく *ögräš* (翻字は "*ügrs*") [本稿のルーン文字の翻字は「内陸アジア言語の研究」12, 1997, pp.44-45 の森安方式に拠る。ただし次の一点のみ変更する。すなわち、後舌とみなし大文字で表記した *š* を、両舌とみなして小文字 *s* で表記する] であり、*ekinti* ではなく *ekin ara* であった。確かにシネウス碑文では表面の風化が進んでいて読みにくいですが、タリят碑文の対応箇所は明瞭に読みとれ、*ögräš* と *ekin ara* であることに一点の疑いもない。なお、*el* は *i* と *l* の2文字でも *l* の1文字のみでも書かれるので、シネウス碑文ではその文字列を *ögräsi eli* と転写できるが、タリят碑文の書き方と比較すればやはり *ögräš eli* と読む方が妥当であろう。

N4, *türük qayan čiq*: ラムシュテットが本文 (p.13) で "*tör... BčQ*" と翻字し、注 (p.44) で "*türk Q i BčQ*" (*Türk Qıbčaq*) と読む可能性を示唆したところを、私はこのように復元する。実はこの部分にキプチャクという民族集団名が読みとれるか否かは、トルコ学のみならずユーラシア史全体の大問題でもある。もしその読みが正しければこの名前が史上に現われる最初の史料になるからである。クリヤシュトルヌイによれば、ラムシュテット自身はその翌年の論文では信念をもってキプチャクと読んだが、慎重なバルトリド・ペリオ・ミノルスキー3氏はキプチャクに関する論文やコメントの中で、いずれもこれを無視したという (S.G.Kljaštornyj, "Die Kiptschaken auf den runischen Denkmälern," *CAJ* 32-1/2, 1988, p.74)。その一方で、トルコ文献学者のマロフらは、この読みを踏襲してきた。クリヤシュトルヌイは、サンクトペテルブルクに所蔵されるラムシュテット拓本では "*čQ*" の2文字しか判読できなかったが、自身が1974~75年にモンゴルの学者シネフーと共に行なった現地調査によって、2人は前半の *türk* に全く疑問の余地がないだけでなく、さらに後半も [*qı*] *bčaq* と読めることを確信したといい (Kljaštornyj 1988, p.75)、一文をものしている。にもかかわらず私はこの読みにも、それを補強するために展開したクリヤシュトルヌイの議論にも従う

ことはできない。同氏らが [qɪ]bčaq 即ち翻字に直せば “[Q i] B č Q” と読む所を、私は “(Q)[G](N:)č Q” と読む。即ち語頭の Q では一致するが、3文字目の B と N は異なっている。しかしルーン文字では後舌の B と N が共に右に膨らむ弓形のストロークを持っているのであり、文字が欠けている場合には混同されやすいのである。私は、後に黒海沿岸にまで進出するベチェネグ族さえまだバルハシ湖の東方にいた(cf. 森安孝夫「チベット語史料中に現われる北方民族—DRU-GU と HOR—」『アジア・アフリカ言語文化研究』14, 1977, pp.30, 32) この時代に、キプチャク族がそれよりさらに東にいたなどと信ずることは到底できない。バルトリド・ペリオ・ミノルスキーも8世紀中葉のウイグルのシネウス碑文の冒頭部にいきなりキプチャクが現われるのは不自然と考えたが故に、ラムシュテットの提案を無視したのであろう。私は、問題の箇所を含む一文を *türük qayan čiq älig yil olurmış* と復元し、「突厥の可汗(たち)が丸々50年間(ウイグルに先行してモンゴリアを)支配していたという」と解釈する。

シネウス碑文 N6 の破断部を挟んでラムシュテットが *yandač....da* と読み、マロフが *yantači...* と読んだ箇所を原碑文で精査したところ、この次の文字は *i* ではあり得ないことが判明した。現地ではそれ以上の考えが浮かばなかったが、帰国後、拓本を見ながらあれこれ検討した結果、*č* と *d* との間にあるのは *m* の1文字のみで、全体の翻字は “Y nt č(m)D a” となり、*yantačimda* と転写すべきであるとの結論に達した。すなわち動詞 *yan*-「戻る」の未来分詞形に一人称単数の所有語尾と位格の格語尾が付いたものとみなし、それを「私が戻ってくるであろう(ような・はずの・べき)時に」と解釈するのである。それでうまく文脈はつながるし、文法的にも問題ないと思うが、ただ同時代の用例を未だ見出し得ていない。

シネウス碑文 N9, *altınč ay* : ラムシュテットは *añ ilki ay* 「最初の月=正月」と読み、オルクン・王静如・マロフ・アイダロフもすべてこれに従っている。さらにバザンもこれを支持している (L. Bazin, *Les systèmes chronologiques dans le monde turc ancien*, Budapest / Paris 1991, p.224)。しかし2つに割れている碑文の上部断片

末尾の süñüs の後には 1 文字分、下部断片の上端の ay の前にも 1 文字分で、両単語の間には 2 文字分のスペースしかなく、“ñ l k i” という 4 文字分を必要とする aṇ ilki が入る余地はない。ay「月」の前に 2 文字くるだけで月名になるのは、aram ay「正月」の“R m”か altınč ay「6 月」の“lt nč”のいずれかの場合だけである。現地で碑石を精査したところ、上部断片の末端には lt の右半分が残っているのが見えた。ラムシュテットの写真にはそれほどよく出ていないが、我々の撮影した写真ではかなり明白であるし、ピチエースの他のメンバーにも確認してもらった。lt と R とは書き方によってはその右半分が酷似した形になり得るが、シネウス碑文ではそうではなく、かつまた古代トルコ語に aram ay が現われるのは、これまで知られている限りではもっと後からである。従ってここは「6 月」と復元すべきである。

シネウス碑文 N12, yabyu atadı : 拓本にはよく出なかったが、ピチエースの複数のメンバーが実際に碑石を見てこの通りであることを確認した。

シネウス碑文 E1, bir yañıqā : 日付としての bir yañıqā「1 日に」は新しく読めた部分である。ラムシュテット以来誰もこう読んでいないが、文字の残画と、すぐ後に eki yañıqā「2 日に」が現われる文脈とから、ほぼ間違いない。

シネウス碑文 E8, tez başı anta : 1981 年 3 月 17 日付けの森安への個人的書簡の中で L. バザン教授は、ラムシュテットが …z başı anta としか判読できなかったこの箇所を tez başınta と復元し、この場所をテス碑文のテスに比定する考えを示された。我々は現地で“(t) i z”即ち Tez と読めることを確認した。S2 の項も参照せよ。

シネウス碑文 E10, ürñ bāgig qara qulluqıy : この箇所はラムシュテットも推定復元しているところであるが、我々もほぼこれに近く読むことができた。ただし大きく違うのは、ラムシュテットが“B W L uQ G” (buluqıy) と推定したところを、新たに“[Q] W L uQ G”即ち qulluqıy と読み、全体を「白い(高貴な)ベグ」と「黒い(卑しい)奴隷」という対立する集団概念の組合せと解釈する点である。「ベグ」ないし「貴族」という支配者集団と、「平民」ないし「奴隷」という被

支配者集団とが対立概念として組み合わせられて表現されることは内陸アジアの遊牧社会では珍しくないし、さらに両者を白と黒の対立で象徴することもモンゴル遊牧民の間でよく知られている事実である。シネウス碑文と時代的に近いキルギスのイエニセイ銘文に見える *ürüñüm qaram* 「私の白いものと私の黒いもの」という表現に対し、マロフやクローソンは、これを「家畜」とみなしている (cf. С.Е. Малов, *Енисейская письменность Тюрков*, Москва-Ленинград 1952, pp.30, 81-82; G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford 1972, pp.643b-644a) が、シネウス碑文の新しい読みは、その解釈にも変更をせまることになる。なぜならシネウス碑文のこの箇所を含む続きには「白い(高貴な)ベグと黒い(卑しい)奴隷を彼は住ませたという。彼はキルギス族の方へ人を(使者として)派遣したという。」とあり、これはキルギスないしその周囲の民族集団に関わる表現と思われるからである。

シネウス碑文 S2, *tez başı* : ラムシュテットが“*t sz*”と判読していた語は、正しくは“*t iz*”である。周知のようにルーン文字の *s* と *i* とはよく似ていて、保存状態の悪い碑文面では判別がきわめて困難である。E8 の項を参照せよ。

シネウス碑文 S5, *altıñč ay beš otuzqa* : *altıñč ay beš* は新読部分である。ただし *beš* は *bir* かもしれない。すなわち「6月25日」または「6月21日」である。

シネウス碑文 W2, *yaqayaru* : 「国境まで」と考え、この語を含む一文を「そこから国境までバスミル族とカルルク族はいなくなった」と解釈する。

シネウス碑文 W5, *yičä bolti* : 「以前のようになった」。ラムシュテットが *ičikmädi* 「服属しなかった」と読んだ部分を、このように読み変えた。

## 8月25日(月)

ハイルハン→シネウス→ハイルハン→ホショーティン=タル→ハイルハン

午前10時45分、シネウス到着。まず遺蹟全体の写真を撮影。その後、前日とに残した西面を採拓。

積石塚の中心部で GPS . 北緯48度32分28秒, 東経102度12分46秒. 高度計で

1445m. 経緯度は去年の計測結果とほぼ同じであるが、高度は100mほど異なっている。

午後1時56分、宿舎に帰着。昼食。午前中、オチルはハイルハンのソム長のところに行き、シネウス・シヴェート=オラーン両遺蹟の調査許可を申請し、採拓や写真撮影の許可費を支払った。

3時24分、今度はホショーティン=タルに向けて出発。

4時08分、ホショーティン=タル(別名ホショーン=タル)遺蹟に到着。ハイルハンから車のメーターで約30kmだった。遺蹟の中心部でGPS測定。北緯48度21分42秒、東経101度51分08秒。高度計で1430m(晴れ)。気温20度。

この遺蹟は発掘の後そのまま放置されたく、一見しただけでは遺構がよく分からない。かなり期待はずれ。しかし規模としてはシネウスより劣っているわけではない。やはり大きなゴロ石の積石塚が中心だったらしい。方形の土塁と周溝と大きな積石がある点ではシネウスと似ているが、南側に出入口があるかどうかは不明 [B.E. Войтов, *Древнетюркский пантеон и модель мироздания в кульрово-поминальных памятниках Монголии VI-VIII вв.*, Москва 1996, p.37 のプランによると北側に出入口がある]。土塁の高さは現状では1mあるかないかだが、シネウスよりは高い。亀趺があり、長さ165cm、幅118cm、高さ(地表から)約50cm。ホゾ穴は珍しく円形で、直径35cm、深さ11cm。うまく自然石を利用して作った素朴な感じの亀趺であるが、首のところだけは巧みに彫ってある。

## 8月26日(火) ハイルハン→ブグト→ツェツェルレク

午前9時27分、出発。昨日の帰路と同じ道を南下。

10時10分、ホショーティン=タル遺蹟の傍を通過。

11時10分、ゲルに寄って道を尋ねる。ここはエルデネマンダル=ソム。雨が少し降っていて寒い。馬が柵のなかに10頭ほど入っている。その外にも馬群がいる。このゲルはフヌイ河のすぐほりにある。向こうには牛の群れが見える。ここで馬乳酒を買い込む。ここからブグトまでは40kmくらいらしい。

11時半、発車。まもなくイフタミル=ソムに入る。

昼の12時36分、固定家屋が数軒あるところを通過。道を聞こうとするが、人影なし。約1km離れたゲルへ行く。高度計で1680m。このあたりの家畜にはヤクが混じっている。やはり先ほどの固定家屋のあったところがブグト(Бугутないし Бугат) =ブリガドだった。

午後1時03分、ついにブグト遺蹟に到着。土塁は縦横40×50mくらいの長方形で、その内側に周溝がある。中心部のマウンドの高さは1mもない。これは突厥第一可汗国時代のものであることが、出土したソグド語の碑文から判明しているが、そのブグト碑文は今はツェツェルレクの博物館にあつて、ここにはない。碑文の発見が遅かったので、人里離れたところなのかと想像していただけに、遺蹟が道路のすぐ傍なのは意外だった。遺蹟の中心でGPS測定。北緯47度49分11秒、東経101度16分58秒。高度計で1615m。

ここはアルハンガイ県のイフタミル=ソムに属し、現地名はハールガティン=アム(Хаалгатын Ам)で、遺蹟のことはハールガティン=ヘレクスルという。

ブグト遺蹟もかつてのモンゴル隊ないしロシア隊による発掘の跡が痛々しい。掘りっぱなしという感じ。柱の礎石がいくつも発見されたとされる中心部は掘り窪められ、その周辺にたくさんの大小の積石や何枚もの板石が散乱している。長方形の土塁と周溝はなんとか確認できる程度。バルバルはかなりよく残っており、吉田と片山が数えたところ、土塁の外側にあるのは276個で、そのバルバル列の長さは、約300m。おおまかに言えば、やはり東の低いほうへ伸びている。しかし正確に見れば、始めのラインは真東より南へ約30度ずれ、160mくらいのところに曲がり角があり、それから北へそれている。土塁の内側にもバルバルが6個認められ、その列の長さは9mである。もしかしたらこれら土塁内部のバルバルは、突厥第二可汗国時代のキョル=テギン廟やビルゲ可汗廟にある臣下の石人の先駆かもしれない(ヴォイトフ・メネスや林の意見)。

レンガは見つからなかったが、瓦は大量に散らばっていたので、成分分析用に破片を採集。なぜか白いフリント石もたくさん散らばっていたので、これも



採集。

3時58分、発車。

4時20分、ホイトタミル河原で、高度1605m。例によって大きい川筋には、広葉樹がびっしりと生えている。まもなくタイハル大岩が見えてくる。

5時11分、ツェツェルレクに入る直前の峠で停車。北緯47度30分06秒，東経101度25分00秒。高度計でちょうど2000m（曇り）。気温12度。

### 8月27日（水） ツェツェルレク

午前9時40分、ホテルのすぐ近くにあるアルハンガイ県博物館に行き、中庭に安置されているブグト碑文の採拓作業開始。

ブグト碑文はクリヤシュトルヌイとリフシツの研究（С.Г. Кляшторный & В.А. Лившиц, “Согдийская надпись из Бугута,” in: *Страны и народы Востока* 10, Москва 1971, pp.121-146; S.G. Kljaštornyj & V.A. Livšic, “The Sogdian Inscription of Bugut Revised,” *АОН* 26-1, 1972, pp.69-102）により学界に紹介された突厥第一可汗国の重要記念碑である。正面と両側面の3面がソグド文字ソグド語であるが、裏面にもなにか文字はある。クリヤシュトルヌイらはこれをブラーフミー文字だと言っている。昨年、肉眼で見た時は、ほとんど摩滅しており、拓本をとっても無駄だと思ったが、今回たまたま側面からはみ出た紙を大澤が押し込んだら、かなりくっきり文字が現われた。そこで急遽、裏面も本格的に採拓することにした。採拓後、計測と写真撮影。この時、館内に保管されている碑頭部の2断片を持ち出してきて、本体と合わせて撮影した。亀趺を含む全体の高さは245cm、亀趺を除く碑石は高さ197cm、幅72cm、厚さ19.5cm。

夕食後の午後9時、合同ミーティング。今日の成果、とくに吉田によるブグト碑文の新しい読みについてモンゴル側に説明。リフシツらが *nwh snk' 'wst* 「新しい僧伽藍を建てよ」と解説したところは正しくは *nwm snk' 'wst* 「教法の石を立てること」である。これまでこのブグト碑文によって突厥第一可汗国に仏教寺院が建てられていたと解釈されてきたが、その根拠は失われた。「教法の

石」とは、この碑文自体を指している可能性大。またリフシツらが  $\beta\gamma\beta w m y n$   $\gamma'\gamma'n$  と読んで突厥の始祖「ブミン可汗」に当てたところも、 $m\gamma'n$   $tykyn$  と読んで「マハン王子」という人物を想定したのも、全くの誤りであった。さらに  $\beta\gamma' t'sp'r$   $\gamma'\gamma'n$  「君主他鉢可汗」としたところは、 $m\gamma' t'tp'r$   $x'\gamma'n$  「莫賀他鉢可汗」であった。

## 8月28日(木) ツェツェルレク→ハルホリン

午前8時40分、朝食。この時、吉田は、これまで「ブミン可汗」と読まれてきたところは、 $w m n'$   $x'\gamma'n$  と読むべきで、漢文史料の「奄羅可汗」ではないかと報告。それから、裏面はやはりリフシツらの言う通りブラーフミー文字で、しかも縦書きだろうという。もしそうなら、このブラーフミーはインド語の仏典か何かで、前日読み取った  $n w m$   $s n k'$  「教法の石」とは「仏法の石」で、予想通りこの碑文そのものを指すことになる。しかも碑文の正面はブラーフミー面であることになり、ソグド面が側面から始まっているという奇妙な事実も、それが碑文建立の経緯を述べたものと考えればうまく説明できる。[ブグト碑文の拓本を作成したことによって判明した重要な事実の一部は9月2日の項にまとめてある。]

10時05分、出発。

夕方6時54分、ホトント=ソムの中心集落に入り、そこの文化センターで、外に展示してあるカラ=バルガスン碑文の碑頭の一部(約5分の2)を手早く撮影・計測。ころがしてみても、なんとこの碑頭は、碑身と一体なのではなく、碑身の上にかぶせて置く形式のものであることが判明。

夜9時08分、カラコルム遺蹟の北のオルホン平原の中にあるゲル式ホテル前に到着。このゲル式ホテルの正式名称は、ハンバイン=ジョールチニイ=バース(ハンバイン=ツーリスト=キャンプ)である。東経47度16分、北緯102度49分。

## 8月29日(金)

ハルホリン→ホシヨ-→ツアイダム→ツァガン=バイシン→ハルホリン

午前11時18分、ホショー=ツアイダム第三遺蹟に到着。去年も来たところなので、写真撮影は簡単に。遺蹟の中心部でGPS測定。北緯47度34分15秒、東経102度49分39秒。高度計で1415m(曇り)。

そこから東北方へ400~500m歩いていったところに第四遺蹟があった。ここは初めてなので、丁寧にビデオと写真撮影。この第四遺蹟にも石櫛(サルコファグ)の板石が残っている。その上でGPS。北緯47度34分28秒、東経102度49分49秒。高度計で1410m(曇り)。気温25度。この遺蹟のあるところもわずかながら小高く、東の方へなだらかに下っている。石彫の類はない。第1バルバルには立派な石が使われている。バルバル列はやはり東へ向かって伸びている。この第四遺蹟はキョル=テギン遺蹟のほぼ真北にある。

12時58分、出発。ツァガン=バイシンへ行くために、ホクシン=オルホン河畔のゲルに立ち寄って道を聞かすが、このまま西へは進めないという。湿地があるらしい。もう一度戻って今朝来た道を南下する。

午後1時53分、到着。遺蹟のすぐ北には丘があり、その向こうまでは見渡せない。東北の端の方に低い山が遠望できるのみ。西にはカラ=バルガスン遺蹟の中で最も高い宮城部分がかろうじて認められる。

ツァガン=バイシン遺蹟の中心的遺構は一辺が36mの正方形。その一番高い所は東北の角で地表から約3m。そこでGPS。北緯47度27分37秒、東経102度46分46秒。高度計で1445m(曇り)。気温27度だが、風があって涼しい。

## 8月30日(土) ハルホリン→カラ=バルガスン→ヘリで空撮→ハルホリン

午前9時42分、出発。オルホン大平原の草はもうかなり黄ばんでいる。やはり河原だからだろう。これに対し、すぐ西と南の山丘の草はまだ緑である。

10時47分、カラ=バルガスン碑文のある場所に到着。巨大な宮城の南壁から約500m離れた所で、別の独立した建築遺構の内部である。ここはアルハンガイ県のホトント=ソムに所属。去年の予備調査で碑石の割れた断片17個を確認し、片山がナンバーをふっているのので、それを採用することにする。まず吉田と大澤

が各断片の2箇所にガムテープを張り付け、それに片山がナンバーを書き込む。また、少し離れた場所にあった断片もこちらに運んできて、No.18とし、ホトントの文化センターにあった碑頭の一部をNo.19とする。このカラ=バルガスン碑文の石質については、破片を去年日本へ持ち帰り、京都大学の石坂恭一教授に分析していただいたところ、ピンク色のカリ長石が最も多く、石英と斜長石はほぼ等量の粗粒黒雲母花崗岩という結果が出ている。現在我々が見ることのできる断片は19個であるが、1908年に大谷探検隊の野村栄三郎が現地を訪れた時には37個あったという(『新西域記』下巻、東京1937, p.467)。ラドロフのアトラス(W.W. Radloff, *Atlas der Alterthümer der Mongolei. Arbeiten der Orchon-Expedition, 1-4*, St.Petersburg 1892-99)も参照してみると、漢文の書かれていた大きな断片はほぼ全て無くなっていることに気付く。それはともかく、厚さだけとつても70cm前後もあった稀にみる巨碑がこれだけこなごなに碎かれているのは異常としか思えない。その理由は、ベルレーがいうように、ウイグルの宿敵キルギスが840年に東ウイグル可汗国を滅ぼした時に故意に破壊したからであろう(cf. Пэрлээ 1961, p.51)。周知のように同碑文はルーン文字ウイグル語、ソグド文字ソグド語、漢字漢文の三体で書かれている。破損した碑文のうち、漢文面が半分程度、ソグド文面が三分の一以上残っているのに、ルーン文字面のみは僅か数パーセントしか残っていない(それゆえ文章として読めない)という事実は、同じルーン文字を使用していたキルギス人が、自分たちも読めるウイグル語の部分を意図的に破壊したという推測を裏付けるように思われる。

それから拓本をとる作業に移るが、相当に風が強いので、やはりテントを立てることにした。北緯47度25分34秒、東経102度39分24秒。

午後2時過ぎ、オチルはトラックでハルホリンへ戻り、拓本許可の申請をしたり、ウランバートルより飛来するヘリを待ち受ける準備。バヤルは碑頭のスケッチ。その他のメンバーは2つのテントに分かれて入って、採拓作業開始。森安と林は、空撮の時のポイントを探す目的と、瓦・レンガの採集を兼ねて、1号車でカラ=バルガスンの都市部を回ることにする。カラ=バルガスンは近代

の遺蹟名で、元来は東ウイグル可汗国の首都オルドゥ＝バリクである。

宮城より相当に離れた地点で、大きな石臼を発見。残念ながら割れているが、幸いその直径は110cmであることが分かる。1949年にここを部分的に発掘したことのあるキシリョフとベルレーは、カラ＝バルガスン即ちオルドゥ＝バリクのはほとんどの家庭には穀物用の挽き臼があったが、その1つとして完全には残っていないと述べ、その原因を、840年のキルギスによるウイグルの首都攻撃に帰している（С.В. Киселев, “Древние города Монголии,” *Советская Археология* 1957-2, pp.94-95; Пэрлээ 1961, p.51）。ジープで回ってみた限りでは、やはり都市址はラドロフの描いた図面（*Atlas*, pl. XXVII-1）のように実に広大な範囲にひろがっている。ラドロフの図面では、少なくとも東西は3 km以上、南北は7 km前後ある。[ただし実際にはもっと広がっていたようである。現在、衛星写真を入手し、奈良女子大の相馬秀廣教授の協力を得て解析中である。一方、独自の情報を持つ白石によると、都市址は東に約25度振れており、その軸に従って南北方向で12 km以上あり、東西方向は軸に直交して5.5 kmである、という。]

天気がよくならないので、今日の空撮は中止かなと思っていた矢先の6時過ぎ、ハルホリン方面からヘリが飛んで来るのを、誰かが見付けて大声をあげた。みるみる近付いてきて着陸したヘリから、オチル所長が降りてくる。あいにくの天候で、都市址を浮き上がらせる効果を期待した斜めからの夕陽は望むべくもない。森安はオチルと協議のうえ、今日これから1時間、そして明朝1時間ずつフライトすることを決断。

夕方7時26分、いよいよ離陸。ヘリによる空撮開始。森安が命綱を腰に巻き付け、ドアを開放したままで、カメラとデジタル＝ビデオを交互に操作。まずカラ＝バルガスンの宮城から始め、次いでその都市址全体、それからツァガン＝バイシン、ホシヨー＝ツァイダムの順に、旋回と高度の上げ下げを繰り返しながら撮影した。

8時20分、ヘリは南下してツーリスト＝キャンプに着陸。

8月31日(日) ハルホリン→ヘリで空撮→ドイティン=バルガス→ヘリで空撮  
→カラ=バルガスン→ハルホリン

午前10時、ヘリ離陸。今日の撮影担当は林俊雄。昨日はヘリの高度の上げ下げを細かく指示しすぎて、かえって失敗したので、今日は高度をほぼ80mに固定。カラ=バルガスンでは都市址の部分で丁寧にとってもらう。

10時半、ドイティン=バルガスを空撮後、そこに着陸。

ドイティン=バルガスは四方に湖があり、白石の指摘どおり(白石典之「モンゴル帝国の首都、カラコルム都市遺跡の調査(2)―オゴタイ・ハンの離宮の発見―」『環日本海研究年報』4, 1997, pp.115-118), オゴデイ=ハーンの春の離宮にふさわしいところ。大きな礎石や基壇が残っている。遺蹟全体が小高い独立丘の上にある。ここはアルハンガイ県のウゲイ=ソムとホトント=ソムのソム境にあるという。

ここで表面が青緑色のきれいなタイルの破片と、レンガの破片とを採集。タイルには厚さの違うものがあり、コーナー用のタイルには2面に釉がかかっていたりする。ここのイスラム的なタイルと、他のモンゴル時代遺蹟にある中国的な緑釉瓦と、粘土の成分に違いがあるのか否か、帰国後に奈良教育大の三辻利一教授に依頼することになっている化学分析の結果が楽しみ。

11時半、ドイティン=バルガスより離陸。今度はホショー=ツァイダムのキョル=テギン遺蹟とビルゲ可汗遺蹟のみをねらってもらう。次にツァガン=バイシンに向かう。これには2つあった。29日に地上で調査したのは1つだけ。それからオルホン河を越えてカラ=バルガスンの碑文の横に着陸。

昼食後、片山の指示で、碑文断片のNo.10とNo.13とを合わせてみる。片山の予想どおりぴたりと合う。ホゾの一部も残っており、これらが碑文のソグド文の最下段にあたることは明らか。既に吉田が1988年の論文(吉田豊「カラバルガスン碑文のソグド語版について」『西南アジア史研究』28, p.27)で初めてソグド文面の最下端にくると指摘していたFr.7(今回の片山編号のNo.13)の前にソグド文が2行延びることになった。

それからバヤルのスケッチを中断してもらい、No.16(大きな碑頭)の上に、

No.17を載せるという大作業をする。これまたびたりと合う。

吉田が念のため、漢文&ソグド文面の碑額と、No.9断片のソグド文面の反対側(ルーン文字があるはずの面)の平らな面も拓本をとってみたいというので、手分けして作業。碑額に関しては、ラドロフの *Atlas*, pl. XXXV-2 の下半分が無くなり、上半分だけが残っていることが判明。No.9からはまったく文字は出なかった。おそらく本来の表面がごく薄く表皮を剥ぐように損傷しているのだろう。さらに、オチルの努力で、球形断片 (No.15) の下部にある花模様 (*Atlas*, pl. XXXV-3) の拓本もとることができた。ただし、以上はすべて1枚ずつなので、日本へは持ち出せない。ルーン面の碑額は、写真でもくっきり文字が写るので、あえて拓本はとらなかった。

この後、林・吉田・片山・大澤・バツトルガは、カラ=バルガスン宮城全体の簡単な測量と、宮城内の瓦・レンガの破片採集に行く。宮城の規模は、長辺が約420m、短辺が約340mの長方形で、一周は約1500mであった。

カラ=バルガスン碑文の断片は、碑頭以外、全てところがして、全ての面を調査した。ただ碑頭だけはあまりに重いので諦めていたが、時間に余裕のできたモンゴル側は、とうとう運転手まで総動員し、ロープを使って、ところがし始めた。下部を見ると大きなホゾがあり、数日前にホトントの文化センターにあった碑頭を調べた時気付いていたように、碑頭が帽子のように碑身の上に載っていたことは明らか。ポラロイドをとって、計測値を記入。宮城の測量から帰ってきた者も写真をとった後、全員でロープを引っ張って、碑頭を元の状態にもどす。バヤルが碑頭のスケッチを完成。

夕方7時06分、撤収。今日は実にたくさん仕事をして、みんな大満足。

8時20分、ツーリスト=キャンプに帰着。

真夜中の12時頃、森安・片山が隣のゲルへ行く。森安・林・片山の3人が改めてルーン面の拓本を読み、吉田の読むソグド面と内容的に合致するところがないか探す。森安は今回初めて、*Atlas*, pl. XXXV-6 として掲げられたルーン文字拓本の左端にある1枚のテキスト(我々の番号ではNo.12)の中に、aftadan

(マニ教の高僧アフタダン)というキーワードを読み取った。これをラドロフ自身は *Die alttürkischen Inschriften der Mongolei*, Band 1, Lieferung 3, St.Petersburg 1895, p.293 では全く誤読して bta adin としていた。これまでルーン文字文献の中には在証されていなかった aftadan という語が、今年になって一気に2つも見つかったことになろう (cf. 森安「大英図書館所蔵ルーン文字マニ教文書 Kao.0107 の新研究」『内陸アジア言語の研究』12, 1997, p.46, L4 & p.50, note)。吉田によれば、この語はソグド面にも現われるが、そのソグド文のある断片はまだ全体の中における位置が決定していないので、残念ながらルーン文字断片の方も相対的位置は決められない。しかし両断片が内容的に対応することはほぼ確実だろう。

ところで吉田は、カラ=バルガスン碑文のルーン面に aftadan, ソグド面に 'βt'δ'nyh が現われることについて、次のような推定をした。ウイグルの牟羽可汗がマニ教に改宗してから、この碑文が建立されるまでのある時期に、オールドゥ=バリクの都に弘多誕(アフタダン)が座するマニ教会が設置された。そのことを記録した部分が、この部分である。どちらの断片も碑文の中の本来の位置を確定することができないが、比較的保存の良い漢文面を参考にすれば、後半にあったことは間違いないであろう。

現在碑文の断片が散在している所に、碑文が本来立っていたのなら、この場所は宮城から500mほど離れた所にある。碑文のそばにあった建物はマニ教の寺院であって、その敷地のどこかに碑文が建てられ、その寺院に弘多誕の座があったのではないだろうか。

吉田の推定は上の通りである。現時点では確証はないが、仮説として提案しておきたい。

さらに森安は帰国後、本碑文のルーン面の検討を重ねるうちに、先のアフタダンの外に、さらに2つ、もしかしたら3つのマニ教専門用語のあることを発見したので、確実な2つについてここに報告する。それは *Atlas*, pl. XXXV-6 として掲げられたルーン文字拓本の右端の1枚(我々の編号の断片 No.7)に見えるが、残念ながら現存の断片は風化が進み、我々のとった拓本では読めなかった



ものである。

**No.7c-5, nuyōšak** : 我々の拓本では NW//// のみしか見えないが、アトラスでは NWGWš/ と見える。ラドロフは Anuyūš アヌグシュという人名か何かだろうというが、全くの誤解である。オルクンは 5 文字目を š ではなく r と読む (H.N. Orkun, *Eski Türk Yazıtları*. II, İstanbul 1938, p.38) が、それも正しくない。漢文・ソグド文の内容から知られる本碑文のマニ教的性格、さらに漢文面第22行に「聴士」とあり、ソグド文第19行と第21行に ny'wš'k「聴者・聴衆」とあることを考慮すれば、これが NWGWš[k] = nuyōšak であることはほぼ確実である。マニ教で一般信徒を指す「聴衆」という術語はマニ文字やウイグル文字では nyošak と書かれ、ルーン文字でも NGWš k と書かれ、普通には nīyošak と転写される。しかしながら実はルーン文字で NWGWš[k] と表記された例がわずかに 1 つではあるが存在する (cf. 森安 1997, pp.46, 49)。後続の円唇母音に引きずられて、nī- が nu- に変化したに違いない。

**No.7c-12, dinavarānč** : 前舌系文字と後舌系文字とが混じっていたこともあり、従来明解のなかった箇所である。ルーン文字文献で前舌系文字と後舌系文字とが混じっている場合、それはほとんど例外なく外来語と考えてよい。そして今回、私はこれがソグド語の δyn'br (dēnâḅar)「マニ教僧侶」の女性形 δyn'br'nc (dēnâḅaranc) と全く同じ形をしていることに気付いた。これは東方マニ教会の公用語の 1 つであったバルチア語の dēnâḅar (中世ペルシア語では dēnâwar) からソグド語に入り、そしてソグド語で女性形を形成する接尾辞 -'nc が付き、さらにウイグル語に借用されたマニ教専門用語に違いない。中世イラン語における本来の意味は「宗教を持つ者、信心深い人」であるが、東方マニ教会では「選ばれた者、純善人」と同義のマニ教僧侶を指す言葉として使われた (cf. Chavannes, Éd. & P. Pelliot, "Un traité manichéen retrouvé en Chine," JA nov.-déc. 1911, pp.554-555; W. Sundermann, "Dīnāvārīya," in: *Encyclopaedia Iranica*, VII-4, 1995, pp.418-419; Sundermann, BTT, XIX, 1997, p.127)。おそらくこの dinavarānč の直前には男性形の dinavar があり、両者相俟って「マニ僧」全体を指したのであろう。そしてそれは表現とし

ては漢文面第10行の「慕闐の徒衆」や第22行の「僧徒」に当たるに相違なからう。本断片 No.7 の全体の中の位置を考慮すれば、No.7cに残されたウイグル語テキストは、漢文テキストの第19～22行目に対応する可能性がある。ただし断定はできない。

ところで、このウイグル語形に、マニ教徒が使用した3種の中世イラン語のうちソグド語にしかない接尾辞が付いている事実は、ウイグルにマニ教を伝えたのがソグド人であったとする見方を傍証する。実際、9世紀に書かれたと推定されるソグド語のある書簡に  $\delta yn'br'nc$  ( $\delta \acute{e}n\acute{a}branc$ )「マニ教尼僧」という語が在証されている (cf. W. Sundermann, "Probleme der Interpretation manichäisch-soghdischer Briefe," in: J. Harmatta (ed.), *From Hecataeus to Al-Huwārizmī*, Budapest 1984, p.305)。このような語がカラ=バルガスン碑文の中に、ウイグル語を含む古代トルコ語文献の実例としては初めて発見された意義は決して小さくない。

後ろの9月2日の条で説明するように、我々の推定によれば、ルーン面の行数は最大116行、1行の字数は70～75文字程度であった。すなわち全体の字数は最大で8120～8700字である。そのうち、ラドロフの調査段階で現存していたルーン面諸断片に残る文字数の合計はわずかに320字弱であって、4パーセント以内である。そのたった4パーセントの中に、マニ教専門用語が3つないし4つも見つかったのである。このことから当時のウイグル社会、少なくともその上流社会にいかに深くマニ教が浸透していたかを読みとるのは、決して的外れではあるまい。

## 9月1日(月) ハルホリン→ホショー=ツアイダム→ハルホリン

午前11時16分、ビルゲ可汗遺蹟に到着。全員に本日の作業について指示。

昼食後は、森安・吉田・バツトルガ・バツジャルガルが一組になって、バルバル列の長さをデジタル=メジャーで計測。オチル・林・片山・大澤は、キョル=テギン碑文の部分採拓、瓦・レンガの採集、必要な測定・撮影などをする。

ホショー=ツアイダム草原の地面の砂は乾ききった感じで、草の密度も濃くな

い。固そうな草ばかり。少なくとも今はそんなに素晴らしい草原ではない。

午後9時、日没直後にキャンプに帰着。まだ明るい。

## 9月2日(火) ハルホリン

午前中は休息。

午後2時、合同ミーティング。先ず吉田がブグト碑文の拓本再解説の進捗状況を説明。次にカラ=バルガスン碑文の大きさと、本来あったと思われるウイグル文・ソグド文・漢文の行数を推定。それに関連して森安は、3年前の予備調査で既にこの碑文の厚さ(側面)が約70cmという、常識をはるかに越えたものであること、及びそこには従来考えられていたよりずっと長く漢文とソグド文が続いていたことを発見し(cf. 吉田豊「無常を説くマニ教ソグド語文書」『オリエント』37-2, 1995, p.28), それによってそれまで本碑文がウイグル第8代の保義可汗の紀功碑でありながら、第7代の懷信可汗の事績ばかりが誌されていて奇妙だと考えられてきた謎が氷解したいきさつを紹介。1990年出版のフデャコフ報告でもなおこの点を誤解し、カラ=バルガスン碑文を先代の懷信可汗の戦勝記念碑とみなしているのを、注意が必要である(cf. Ю.С. Худяков, “Памятники уйгурской культуры в Монголии,” in: *Центральная Азия и соседние территории в Средние века*, Новосибирск 1990, p.87). 林はカラ=バルガスン宮城の測定結果を、ラドロフのアトラスと比較しながら報告。片山はビルゲ可汗碑文の復元状況を報告。モンゴル側からはカラ=バルガスン第二碑文の出土地について、ジャルマンタイ(ジルマンタイ, ジャランタイ)河というオルホン河に注ぐ支流(ホトントより流出)のほとりで、カラ=バルガスン遺蹟より遠くない所から見つかったはずで、詳しくはシネフーらの記述を見てほしいと示唆あり。

吉田によるこの時の説明に、翌9月3日の再計測結果、そしてさらに帰国後の検討の結果を加えたものは次の通り。

### ①<ブグト碑文>

碑文の第1行目は次のように読むことができる：

rtý (m)[wn]k nwm (sn)k' 'wst't δ'r-'nt tr-'wkt '(')šy-n's kwtr'tt 'xšy-wn'k

「この『教法の石』をトルコのアシナス一族の支配者たちが立てた」

従来 '(')šy-n's は cýnst'n 「中国」と読まれ、kwtr'tt は kwtr(s)'tt と転写されて、その意味について種々の解釈が提案されてきたが、全体は「アシナス一族の」の意味であって、漢文資料に突厥の王族の姓として現われる「阿史那」の原語はソグド文字では ''šyn's と表記されたと考えられる。なお、帰国後、京都大学所蔵のカラ=バルガスン碑文の拓本を再調査したところ、同碑文の6行目の冒頭部に、''šyn's kwtr twrk 'xs'wnh 「アシナス一族(の)トルコ(=突厥)の領土」と読める部分があることが分かった。漢文面で「[阿]史那革命」とある部分に対応するので、これもソグドの ''šyn's の読みと解釈を支持するであろう。これによって、阿史那の語源を ars(i)lan 「ライオン」であるとみるベックウィズの奇矯な説(Ch.I. Beckwith, *The Tibetan Empire in Central Asia*, Princeton 1987, pp.206-208)も、「kök türük」 「青き突厥」の「青」と同じ意味のコータン=サカ語 āššeina やトカラ語 āšna やソグド語 'xs'yn'k と阿史那を結び付けるクリヤシュトルヌイの新説(S.G. Klyashtorny, "The Royal Clan of the Turks and the Problem of Early Turkic-Iranian Contacts," *AOH* 47-3, 1994, pp.445-447)も存在理由を失うことになる。

## ②<カラ=バルガスン碑文>

現地で計測した数値、並びに京都大学等が保管する拓本を調査して判明した数値と碑文の行数により、碑文全体の復元値について次のような結論に達した。

碑身：正面の幅176cm；側面の幅70cm前後；面どりした部分5.5cm

漢文面（正面中央より左側面まで）：34行，縦書き

正面19行（実数）＋面取りされた部分1行（実数）＋側面14行（推定）

推定の根拠は拓本の漢文は10行で44～46cm あるから。

ソグド面（正面中央より右側面まで）：45行，縦書き

正面27行（推定）＋面取りされた部分1行（推定）＋側面17行（推定）

推定の根拠は拓本のソグド文は行間が、正面では3cm強、側面では3.5～4cm あるから。

ルーン面（反対正面全体）：行数は最大で 116 行程度（下記参照）、横書き  
1 行に 70～75 文字程度（語と語を区切る記号：も含む）

推定の根拠は 20cm の中に 8～9 文字が入っているため。

碑身の高さについては確実なことは分らない。ただし碑身の幅が 176cm であることは判明しているので、仮に横と縦の比率が 1：2 であったとすると、352cm になる。この高さであるとする、漢文版の 1 行の文字数は 78 文字程度であったと考えられる。その推定の根拠は、拓本の漢文は縦 10 文字で約 45cm あることである。一般的に利用されているシュレーゲルのテキスト (G. Schlegel, *Die chinesische Inschrift auf dem uigurischen Denkmal in Kara-Balgassun*, Leiden 1896) は 75 文字を復元している。ところで漢文を含む、位置が未比定の断片 No.5 は、その大きさから側面にではなく正面に属することが分かっており、そこには 13 行の幅があり、1 行で確実に 7 文字以上残している。これは既に知られている断片の 46～49 文字目に設定されている空白部か最下段のいずれかに置かざるを得ない。つまり 1 行は 75 文字よりさらに少なくとも 5 文字前後長く見積もらなければならない。1 行に 80 文字あったとすると碑身の高さは 360cm 程度になる。

碑身の高さが仮に 360cm であったとすると、ルーン文字の行は 124 行程度入る。その根拠はルーン文字の行間の平均が 2.9cm あることである。しかし、我々が発見した碑文の下端を構成する断片 No.10 からは碑文ルーン面の下方に 8 行以上の空白があったことが分かるから、ルーン面は最大で 116 行程度であったことになる。

9 月 3 日 (水)

ハルホリン→ホショー=ツアイダム→カラ=バルガスン→ハルホリン

午前 10 時 36 分、ビルゲ可汗遺蹟に到着。早速、運転手も集めて本日の作業の指示。まず倒れている碑石の厚さを計るためと、埋まっている石が本当に亀趺であるか否かを確認するため、オチル所長の許可の下、少しだけ掘ってみる。我々の隊には本格的発掘は許されていない。間違いなく亀趺であった。しかし

亀趺が大理石(しかも粒が粗い)では、あの重い碑身本体を支えられたののだろうかや疑問が残った。

それから、4つの遺蹟のバルバル列の長さ・方向・ゆがみなどをヴィジュアルに再現する目的でジープ・トラック・人員を総動員して配置し、写真とビデオで撮影する作業に入る。相当に手間取った。

午後3時46分、カラ=バルガスンへ向けて出発。直接西へ行くルートをとる。

4時18分、オルホン河の本流をジープで渡る。水流の幅は30mくらい。このあたりの草は、ホシヨウ=ツァイダムと違い、びっしりと生い茂っていて、きわめて密度が濃い。たいへんよい牧場なのだろう。ただし悪路。

4時35分、カラ=バルガスン宮城の西面の馬出し(甕城)のところに停車。分かれて作業を開始。吉田と片山は碑石断片の計測し忘れた部分についてやり直し。オチル・バヤル・ボルドは、ツァガン=バイシンで集めた各種のレンガと比較するため、ここで形の完全に近いものを探す。確実に火事で焼けた跡のある瓦を幾つも発見。キセリョフやペルレーがいうように(Киселев 1957, p.94; Перлэ 1961, p.51), これは東ウイグル可汗国がキルギスに滅ばされ、宮城に火をかけられた時のものに相違ない。林・大澤・バツトルガは城壁の高さの計測。

それから碑石の再計測をしていた吉田・片山と合流。今日の成果を聞く。碑頭は高さ150cm弱、推定の横幅222cm、厚さ72.5cm、さらにルーン面の「圭」字型碑額は横幅が60cm、縦の長さは54cm前後として復元するのが妥当とのことである。ルーン文字の碑額について、かつてラドロフは横には毎行1字分欠けており、下には1行文の脱落があるとして、テキストの復元を行ない(W. Radloff, *ATIM*, Band 1, Lieferung 3, St.Petersburg 1895, pp.291-292), オルクンがそれに追従した(H.N. Orkun, *Eski Türk Yazıtları*, I, İstanbul 1936, p.85)。その後、2行目冒頭の1字を η ではなく Y と修正して ay と読み改める以外、大枠はラドロフ説が定説化していたが、正確な計測の結果、現存5行の下には1行ではなく4行分の脱落があったはずであることが判明した。それゆえ、その文章はラドロフの考えたような簡潔な体言止めではなく、おそらく、吉田が推定するように、ソグド語

の碑題と同じような文章の形になっていたに違いない。一方、林・片山は断片 No.1 をその形状から亀趺の一部と推定した。

もう時間がなくなったので、はじめ予定していたアトランダムな都市址廻りは中止。8月30日に下見をした森安の乗る1号車の先導で、宮城西南部に向かって南から北へまっすぐ延びる巨大な大通りに行く。林のデジタル=メジャーによる計測では、道幅が100m 強 (110mまではいかない) だった。

それから南郊の、礎石が100以上も散在している地点に行く。これらの礎石の半ば以上は、ここから南側に現代の農場をトラクターなどで開拓した時に掘り出され、邪魔なので草原(=都市遺蹟)側に放り出されたものに相違ない。そこから宮城を振り返ると、4～5kmくらいは離れているらしく、城壁が低くしか見えない。それ程離れていてもなお、大きな柱の礎石を使う大建築群があったということ。東ウイグル可汗国の首都オルドゥ=バリクは、天山地方のビシュバリク(北庭)や高昌に比べても、はるかに巨大であったということを再認識した。もちろん8世紀当時世界最大の人口を誇った花の都長安の80～100万には及ぶべくもないが、少なくともヨーロッパのパリ(25000人)やケルン(15000人)を凌駕していたとみて間違いないのではなかろうか。

午後8時過ぎ、帰途につき、9時15分頃、キャンプに帰着。

## 9月4日(木) ハルホリン→イフ=ホショートウ

午前9時50分、出発。

12時47分過ぎから、高度がどんどん高くなり、草原がぐっと小さくなる。これからの峠が北のホクシン=オルホン側と南側との分水嶺。この辺りでは高度が高くなっても、北斜面の森林はないとオチルより説明あり。分水嶺の南側はゴビに直結しているのだから、それも頷ける。既に高度1800m代に入っているのに、樹木は1本も見当らない。これまで回ってきたハンガイ地区では考えられない。山丘の稜線まで緑の草原。

午後5時17分、バヤンオンドル=ソムに入り、一旦停車。道を聞く。

7時22分、ようやくイフ=ホショートウのキュリ=チオル碑文前に到着。風が強い。全天、曇っている。森安が3年前に予備調査に来た時より、草の色はやや黄色いという印象。

石櫛(サルコファグ)の上でGPS測定。北緯46度55分08秒、東経104度33分47秒。高度計で1560m。石櫛の板石のひとつには立派な鳳凰のレリーフがある。石櫛の散在している中央部と第1バルバルとの距離を巻尺で計ったところ、28m。この中間に碑文がある。そして石櫛と碑文との間に瓦・レンガが大量に散らばっており、碑文と第1バルバルとの間にいくつもの石彫がある。バルバル列に沿ってジープで移動。ずっとほぼ真っすぐなのに、最後の方で北に曲がっている。その長さは1km前後。明日正確に計測し直す予定。

#### 9月5日(金) イフ=ホショートウ

午前10時24分、出発。まずバルバル列の様子の撮影を総動員で実施。それからキュリ=チオル碑文の上にテントをかぶせて立て、2セットの拓本をとる作業にかかる。バヤルと大澤はテント外で石彫の調査。森安は景観などの記録。

本日の採拓作業により、これまで空白と考えられていた北面にも文字が1行あることが判明した。さらに南面にも従来知られているより1行増えることが確認された。これらは拓本をとることによってなされた発見である。

8時頃、全員がキャンプに戻り、夕食。

#### 9月6日(土) イフ=ホショートウ→マンダルゴビ

午前10時10分、キャンプをたたんで出発。

11時05分、デルゲルハン=ソムに到着。

午後3時57分、ドントゴビ県のエルデニ=ダライ=ソムを通過。高度計では1400m。ここから南は本格的なゴビで、河川はなくなるという。水は泉・井戸や雨が降ってできる水溜まりのような湖沼からとるらしい。ゴビ地区でも少しは雨が降る。山丘らしきものは見当らない。それでも地平線が見えるわけでもな



い。平皿状草原とでも言おうか。ゆるやかな起伏が視界をさえぎる。ゴビといっても決して砂と石ころだけではない。草の密度が薄く、上から見ると茶色だが、斜め横から見ると緑の草原に見える地区を指している。

6時20分、マンダルゴビ市が見えてきた。市といっても日本の田舎町程度。

## 9月7日(日) マンダルゴビ→ダランザドガド

午前9時10分、出発。昨日と変わらない平皿状草原の連続。

午後1時41分、昼食のため停車。北緯44度12分39秒、東経105度04分49秒。高度計で1260m。風はそんなに冷たくないが、かなり強い。気温26度。ここでバットルガが緑色と赤褐色の石器を発見。地表から実に簡単に見つかる。

5時25分、ダランザドガド市内に入る。人口は1万を越す。高度計で1450m。

## 9月8日(月) ダランザドガド→セブレイ

夜中、部屋の中は暖かった。やはり南モンゴルである。明け方でさえ室温は20度あった。寝袋不要。それでも外気は肌寒い。

午前10時頃、ホテルの近くのウムヌゴビ県博物館へ行く。館員の女性が、展示品の説明をしてくれる。また、展示していない青銅器時代のカラスク式短剣や満州語文書やチベット語仏典なども見せてくれる。ここの館長からセブレイ=ソムの方へ電話をしてくれたところ、セブレイ碑文はやはり現地にあるという。安心してセブレイに向かうことができる。

10時47分、出発。ここから先は全てゴビ=アルタイ山脈地方の一部。

午後1時41分、昼食のため停車。高度計で1635m。岩だけでできている付近の小山を廻り、岩を靴で蹴飛ばすと、実に簡単に割れて、小石になってしまう。

3時10分、発車。このあたりは半草原というより半砂漠という表現がぴったり。それでもラクダのみならず、牛の群も羊群もいる。

6時、セブレイ山が近付いてきた。

6時08分、セブレイ碑文のことを聞くためにゲルに寄る。このゲルのあると

ころは山の麓だが、全く草がない。こんな所にも人が住めることが不思議。

6時12分、少し離れた別のゲルに行く。そこで文字のある白い石はあつちだと、東の方を指さされる。確かに数km先に白っぽいものが見える。ジープでそこに向かう。

6時23分、白い石の前に到着。確かにセブレイ碑文である。なんとも小さく、しかもかなり風化が進んでいる。北緯43度34分09秒、東経102度15分06秒。高度計で1545m。最初はセブレイ=ソムに2泊してゆっくり調査する予定を組んでいたが、周囲に遺蹟らしいものは何ひとつなく、碑文の文字もごく僅かしか残ってないのを目のあたりにして、予定を変更。これから急いで碑文にテントをかけ、日没ぎりぎりまで採拓の作業をした後、近くの山の端でキャンプし、明日の午前中にはここを切り上げるようにする。2時間弱で正面の拓本2枚と裏面の拓本1枚とを取り終える。この間、森安と林はジープで周辺の調査。

8時40分頃、テントを畳んで撤収。8時50分、キャンプ地に到着。

## 9月9日(火) セブレイ→ダランザドガド

午前6時15分、森安と吉田は起床し、昨日とったばかりのセブレイ碑文の拓本を検討。クリヤシュトルヌイ・リフシツ両氏の読み(С.Г. Кляшторный & В.А. Лившиц, “Севрейский камень,” *Советская Тюркология* 1971-3, pp.106-112; S.G. Kljaštornyj & V.A. Livšic, “Une inscription inédite turque et sogdienne. La stèle de Sevrey (Gobi méridional),” *JA* 1971, pp.11-20; 護雅夫「セブレイ碑文」『東洋学報』55-4, 1973, pp.109-120)にはかなり無理があり、年代や主人公を特定する手がかりとなるキーワードがいくつもなくなっていく。本碑文がウイグルのものであるという基本的なことさえ、文面のみから証明するのは困難となる。もちろん、状況証拠からはこの基本線は揺るがないけれど。

8時40分、朝食。その後、オチル所長はセブレイ=ソムのソム長に会いに行く。拓本をとったことの事後報告と調査許可費を支払うため。ついでに、碑文の風化が激しいので、ソムの博物館などで保管するよう進言したという。

オチル以外は再びセブレイ碑文の調査に行く。やはりルーン面につきクリヤシュトルヌイがウイグル王族のYaylayar「ヤグラカル」氏とかIji「英義」可汗(即ち東ウイグル可汗国第3代牟羽可汗)と読んだところは無理であることを直接確認。また、ソグド面につきリフシツが「ウイグル」と読んだ2箇所も幻と消える。たまたま地元の遊牧民が近付いてきたのでインタビュー。この初老の牧民は1950年代からここに住んでいるという。1968年まではこのあたりに2個の碑文があった。1つは白い石で、もう1つはボル(薄茶)色の石だった。後者には両面に碑文があったが、誰かが持ち去った。白い石の方は、少なくとも1950年代からは今と同じ位置にあるとのこと。1971年のクリヤシュトルヌイらの論文で、エフレモフの情報では1948年当時ここに2個の碑文があったというが、それらはこの2つのことで、セブレイ碑の断片が2つあったのではないと判断してよからう。

### ＜セブレイ碑文の現況＞

白くて粒の粗い大理石。縦80cm、横52cm(ただし正面の碑文のある平らな面のみ計れば45cm)、厚さ69cm。正面にはルーン文とソグド文が共に7行ずつシンメトリカルに残っている。文字の彫りは浅いうえに、かなり風化している。カラ=バルガスン碑文では片面にソグド文と漢文が左右対称に配置されていたが、本碑文もそれと似たような形式をしていたと思われる。向かって右にあるソグド文は、左から右に行が進むので、明らかに元の第1行から第7行までが残っていることになる。ルーン文の方は行の進行方向に関して必ずしも法則がないので、確言はできないが、形式から判断すればここでは右から左へと行が進むとみなしてよからう。従ってやはり元の第1～7行が残っていることになる。

クリヤシュトルヌイらは現存の碑石断片で本来の平らな面が残っているのは正面だけとみなしたが、そうではない。裏面も平らであり、漢字らしき文字が彫られている。しかも縦の行を画する界線とおぼしきものまでかすかに残っている。その界線の方法は、正面のソグド文の方法とはほぼ一致する。それゆえ、石の厚さ69cmというのは本来の碑文の厚さである。もし正面のルーン文+ソグ

ド文の14行で完結していたなら、正面（および裏面）より側面（厚さ）の方が幅広くなってしまう。そのような奇妙な形状の碑文はありえない。

さらに、ソグド文1行目の冒頭には、文字の長い尻尾とバンクチュエーションがあるが、これは吉田の考えでは、ソグド語碑文の冒頭に現われるタイトルの一文の終わりにくる動詞の語尾である。カラ=バルガスン碑文では対応する箇所には np'xštw δ'rym「我々は書いた」とあり、それと同じであればこの長い尻尾は文字 m のそれであったことになる。あるいは np'xštw δ'r'nt「彼（ら）は書いた」と3人称複数形を用いていたかもしれない。その場合には文字 t の尻尾ということになる。この推定が正しいとすると、ソグド文1行目の上方には、丸々一文が入るだけのスペースがあったはずで、本来の碑文は現存部より上方に少なくとも2mくらいはあったはずである。もちろん下方も欠落していると考えられる。69cmという厚さは、突厥のキョル=テギン碑文やビルゲ可汗碑文の厚さよりはるかに厚く、ウイグルのカラ=バルガスン碑文とはほぼ同じである。このことを考慮すれば、本来のセブレイ碑文は、カラ=バルガスン碑文クラスの堂々たる巨碑であったとする方が自然であろう。ただし周辺には、同じ碑石の片割れとおぼしき断片はひとつもところがない。

#### <セブレイ碑文の立地と周囲の景観>

碑文は、セブレイ=ソムの東南約6kmの地点にある。そのあたりは、ズールン(Зуулун)山脈の西端の扇状地で、ズールン山脈とセブレイ山+マンダルト山の中間のオイドル(Оёдол)という平原の中の、ナランギーン=アム「太陽の口」と呼ばれる所である。オイドルとは東のズールン山脈と西のセブレイ山+マンダルト山との間に広がる幅7～8kmの南向きの斜面状平原のこと。この平原はやや急な角度で南の方5～6km先まで下っていき、半砂漠状の大平原につながっている。そのはるか向こうの数十km先にはフレン=ハナン山脈・ノヨン山などがそびえている。これらの山々は馬で容易に越えられ、その南側は中国のエチナ河下流域に通じるが、オイドルがエチナ河流域と直結しているわけではない。北側はオイドル平原が上まで続いており、平原の最も高いところがまっ

すぐな地平線のような稜線になっている。その稜線の東端にズールン山脈、西端にマンダルト山が見えるが、ごく低い。碑文からこの稜線までは約3 kmあり、高度差は60mだった。この稜線のところまで上ってみると、その北側もずっと同じような平原で、その先に別の山脈が低く見えた。その方向には本当の砂漠があって、車で越すには難渋するが、馬ならばなんの問題もないという。その砂漠の向こうはオング河下流域だから、モンゴル本土の中央部のオルホン河流域から中国のエチナ河流域に出るルート上に、このオイドル平原は位置していることになる。現在でも中国から来る商人がこのルートを使い、ジープで1日かけて北の砂漠を渡り、オング河流域のアルバイヘールに出てからハイウェイでウランバートルに直行するという。甘粛地方の河西からウイグルへの入口として唐代の漢籍に見える「花門山」(孟楠「回紇別称『花門』考」『西北史地』1993-4, pp.39-43 参照) というのは、まさしくこのあたりを指すに違いない。

このオイドル平原は半砂漠状の扇状地で、地表は草よりも砂礫が目立つゴビである。礫の形は小さ目で、砂利ないしこぶし大くらいのもが多く、砂は固まっており、足や車輪はもぐりにくい。草は少ないが、それでも羊やラクダの群れが見られる。南方と西方は見晴らしがよいが、雨が降ればかなりの数の川が流れるはずで、現に涸れ川が相当ある。だから碑文や建築物が洪水で押し流される危険があり、碑文の設置場所として絶好とは言い難い。今回の調査で、もとのセブレイ碑文ははるかに巨大なもので、現在はごく一部が残っているだけだと判明したが、周囲に別の断片らしきものは見当らなかった。このことと、現在のセブレイ碑文の周囲に遺蹟の痕跡が全くない事実とは、本碑文断片が上手の方から押し流されてきたと推定することによって、ある程度うまく説明されるかもしれない。さらにはこの断片が全く別の所から運ばれてきたとの推測もありえないわけではない。しかし、断片とはいえ大人数人で持ち上げられるようなものではないから、そのような重い石をわざわざ遠くから運んできた理由も見付けにくい。

この碑文のルーン面にYaylayar「ヤグラカル」とInji「英義」が読み取れると信

じたクリヤシュトルヌイらは、本碑文が周囲に埋葬施設を伴っておらず、しかも上記のような交通の要路に立てられているという事実から、これを牟羽可汗の中国に対する戦勝記念碑とみなす説を主張した。これに対して護氏は強い疑念を表明し、むしろもっと後の甘州ウイグル時代のものではないかとの考えを示された。詳細は未発表のままに終わったが、甘州ウイグルにも「英義」なる名称を持つ可汗がいることが大きな根拠であったろう。しかし今やこのInji「英義」も消滅し、問題は振り出しに戻ったのである。

ところで近年、822～823年に行なわれた有名な唐蕃会盟は、唐・吐蕃二国間の講和に止まらず、実は唐・吐蕃にウイグルを加えた三国間の講和であったという驚くべき事実が明らかになってきた。それは山口瑞鳳・セルブ両氏によりチベット語史料中から復元されたところであるが、森安はそのことを直接示唆する漢文文書が敦煌から出土していることを指摘しておいた(長野泰彦・立川武蔵編「チベットの言語と文化(北村甫教授退官記念論文集)」1987, p.57 & p.67, n.20)。ところがつい最近、私が指摘したバリ所蔵の文書断片 P.3829 にびたりと接合する断片がサンクトペテルブルグ所蔵の敦煌文書中より発見され(李正宇「吐蕃論董勃蔵修伽監功德記両卷的発現、綴合及考證」『敦煌吐魯番研究』2, 1997, pp.249-257)、ここに三国会盟はゆるぎなき史実となったのである。ラサに現存する唐蕃会盟碑によれば、唐と吐蕃の講和条約の本質は、両国間の国境確定である。とすれば、セブレイ碑はこの三国会盟を、ウイグルの側で記念し、ここまでは明らかにウイグル領であることを内外に宣言する性質のものではなかったか。我々は今このように推測している。またこの三国会盟は、8世紀末の北庭争奪戦の勝利者がウイグルであり、その後も天山地方に足場を維持していたからこそ、ありえたのである。さらに、840年にウイグルがキルギスに敗れてモンゴリアから逃げ出した時にも、大集団が東部天山地方に向かって新たに西ウイグル王国を建設する余裕があり、別一派が花門山を通して河西地方に向かい、まずはエチナ方面に拠り、後に南進して甘州ウイグル王国を立てることができたのである。

午後1時35分、出発。ほとんど昨日と同じ道を帰る。

3時29分、赤い岩や土が露出している地点で停車。ズールン山脈の東端。このあたりの道のみ昨日と少し違う。北緯43度17分16秒、東経103度02分58秒。高度計で1460m。昨日昼食をとった所やキャンプした所と同じく、ここでも周囲の小山の岩は靴で蹴飛ばすだけで簡単に割れて、小石になってしまう。それほどまでに岩がボロボロに風化している。これほど激しい風化の原因は日較差と年較差である。ゴビ=アルタイとはゴビ地方にあるアルタイ山脈の意だが、実はアルタイ自身もゴビになっている。すなわち主に稜線部分に露出する岩山以外は、広大な半砂漠ないし半草原で覆われており、樹木は全く生えていない。おそらくゴビ=アルタイ全体がゴビの石ころや砂の供給源になっているのだろう。昨日から今日まで移動してきたゴビ地域は、ハンガイ地域に比べて草の状態は相当悪いが、それでも遊牧民や馬・牛・羊・ラクダがあちこちにいた。

3時46分、発車。ここからゴビ=アルタイ山脈の東端部をなすゴルバン=サイハン山脈の山中に入る。

6時25分、東方にダランザドガドが遠くに見えてきた。まだ山の斜面の高い所(1700mくらい)から見下ろしていたので、ダランザドガドは10km先くらいにしか見えなかったが、実際には30kmもあった。

## 9月10日(水) ダランザドガド→マンダルゴビ

午前10時、出発。これから2日かけて500km北のウランバートルまで帰る。

10時半、前方は地平線まで見渡せる大平原。もちろん半砂漠ないし半草原。右手と左前方には遠く低い山。後方にはまだかなり高くゴルバン=サイハン山脈が聳えている。

午後7時50分、マンダルゴビ市のホテルに到着。

## 9月11日(木) マンダルゴビ→ウランバートル

午前10時10分、ホテルのすぐ近くにあるドントゴビ県博物館を訪問。女性館長に案内してもらう。庭にはテュルクの石人1体と、椅子に座った独特の形の

モンゴルの石人2体とがある。まずこれらを撮影。それから内部に展示してある青銅器時代の刀子や飾り板、さらにルーン文字で Qutluy「幸運のある」と書いてある青銅ないし真鍮製のタムガ印章をガラスケースより取り出して撮影。印章にはインクを付けて印鑑(印影)も採取。その大きさは2.6×2.6cm。この印章の本体は小さくて薄く、つまみの部分はこわれてなくなっている。しかし文字の部分は完全に保存されている。これはボルドの本(Л. Болд, БНМАУ-ын нутаг дахь хадны бичээс, Улаанбаатар 1990, pp.69-70)に既に紹介されているが、出土地についての記載はなく、ボルドが館長に尋ねても出土地は不明とのこと。ただし、この博物館の展示物は基本的にはドントゴビ県で見つかったものという。

正午、予定よりかなり遅れてマンダルゴビを出発。

夜9時、ズーンモド近くのツーリスト=キャンプを通過。

10時半頃、予約なしで飛び込んだグランド=ホテルで値段の交渉がまとまり、ここに落ち着くことにする。

## 9月12日(金) ウランバートル

午前11時、日本側メンバー5人は、片山の部屋に集まり、ミーティング。これからの仕事の予定と分担を相談。それから今回とった2セットの拓本は、昨夜全てホテルでおろしたので、そこから日本へ持ち帰る方を選別する。

午後2時半、歴史研究所に着くと、オチル所長自らが出迎え。さっそく所長室で合同ミーティング。まず来週5日間を予定している碑文テキストの研究会では、日本モンゴル双方が合意できるものとして最低限、各碑文テキストの翻字(transliteration)を完成させることにし、そのための日程と分担を決定。そしてとりあえず2年度目の仮報告書では、分担者の責任で各自の名前を付して転写テキストと翻訳を作ることにする。

日本側が出版の義務を負う最終報告書の体裁と内容についても、かなり議論する。去年・今年・来年の3年間でとる拓本の1セットを日本側に無期限貸与するという条件が満たされるならば、各碑文のテキストと翻訳のみならず、拓



本の写真や遺蹟・碑文・遺蹟周辺の景観のカラー写真などを盛り込んで、ラトロフのアトラスに匹敵するような豪華本を作るよう日本側が努力することを再確認。そのアウトラインはセブレイのキャンプで、夜中、酒を飲みながら話し合ったもの。

その後、吉田はカラ=バルガスン出土といわれ、現在は歴史研究所が所蔵している漢文の「大唐安西阿史夫人」墓誌の採拓作業。森安が形状や計測値をメモ。林・片山・大澤は、研究所にある拓本の撮影作業。

### 9月13日(土) ウランバートル

午前10時半より、ホテルの林の部屋で林・吉田・大澤は、昨日に引き続き、拓本の撮影作業。森安と片山は片山の部屋で、あちこちの遺蹟で採集してきた瓦・レンガの整形作業とラベルの貼り直し。白石も手伝いにきてくれる。

午後4時過ぎ、岩壁画のあるイフ=テンゲリン=アムへ行く。岩壁画はトール河に面して突き出た断崖の高い所にある。メインの壁画は確かに紀元前の青銅器時代のものらしく見えるが、驚いたことにウイグル文字モンゴル文の墨書銘3つと、ボクタクというモンゴル帝国時代のモンゴル婦人に特徴的な帽子を被った婦人の絵もあった。こういうものがこんな所にあるとは全く知らなかった。森安は少しく時間を費やして、解読に挑戦。墨書銘の1つは、モンゴル時代のモンゴル語発令文書の冒頭にくる典型的な定型句であることがすぐ判明したが、他の2つは解読できなかった。しかし3つともほぼ同じ書体であることから、これらが13~14世紀のものであることは明らか。婦人の帽子ボクタクもこの見方を支持してくれる。

### 9月14日(日) ウランバートル→ゾーンモド→ナライハ→ウランバートル

午前9時40分、ゾーンモドへ向け出発。

10時半、ゾーンモドのトゥブ県博物館に到着。さっそく屋外にあるムハル(ムクル)遺蹟出土の突厥時代の亀趺を調査。ポラロイドを2セットとって、計測値

を記入した。亀趺の大きさと碑身を受けるホゾ穴の大きさから推定すると、なくなっている碑文の大きさは、横幅 77~80cm, 厚さ 20cm前後, 高さは 2~3 mであろう。少なくともブグト碑文よりは大きかったと思われる。亀趺の中央部の両側面には、突厥阿史那氏の特徴的な山羊のタムガ(所有印>紋章)と、珍しい蛇のタムガとがあるが、いずれも一般的な陰刻ではなく、レリーフである。

11時26分、郊外のマンジュシュリー寺院の山門に着く。高度計で1485m。

12時43分、ナライハへ向けて出発。いつのまにか草原の草が一面に黄色くなっている。この変化は我々がウランバートルにいたこの2・3日中のことなのだろう。

午後2時15分、道に迷いつつ、ようやくトニユクク遺蹟に到着。トニユクク遺蹟のバルバルは1列だが、2つの石櫛(サルコファグ)があったと思われる。共に花崗岩製で立派な花模様が彫られている。2つの石櫛の中間でGPS。北緯47度41分41秒, 東経107度28分42秒。高度計で1425m。バルバル列はこの中間地点から東の低い方へ延びている感じだが、正確には真東より北へ10度余りずれている。バルバルの大きさは様々だが、長いものは地表から150cmも出ている。全体としてキョル=テギン遺蹟のバルバルより太くて長いという印象。

バットルガの指摘により、トニユクク第1碑文北面第9行(通しで第33行目)にある、これまで kiši「人, 男」と読まれてきた語が、完全にラドロフの捏造であることが判明。ただしどう読むべきかは今のところ不明。[R. ジロー, G. アイダロフ, T. テキンらはラドロフを踏襲するが、ラムシュテットのテキストのみは yiyi と読み, 'nacheinander' と訳していることを帰国後知った, cf. P. Aalto, "Materialien zu den alttürkischen Inschriften der Mongolei, gesammelt von G.J. Ramstedt, J.G. Granö und P. Aalto," *JSFOu* 60-7, 1958, pp.40-41.] ただこの一事によって、アトラスの修正拓本がいかにも鮮明であっても、やはり我々独自に拓本をとり直す必要があると痛感された。来年の日本側メンバーが調査にやって来るまでに、トニユクク碑文の拓本を2セットとってもらえるようオチル所長に依頼。

片山は、トニユクク第2碑文東面の石の破損は、碑文を作った時点からのもの

のであり、それゆえにこの部分には当初から文字が彫られていなかったことを確認。碑石の形状からみて、トニユクク碑文は鹿石か何かの再利用ではないかと推測されてきたが、その可能性はますます高くなったといえよう。トニユクク碑文は本来の位置より動いている可能性があるが、やはり亀趺はなかったと思われる。トニユククほどの大人物であっても、可汗一族の阿史那氏でなければ、わざわざ新品の碑石が作成されることはなく、亀趺も使われなかったのだろう。そうだとすれば、突厥時代について、亀趺だけが残るイデル遺蹟やムハル(ムクル)遺蹟を可汗クラスのモニュメントとする見方はさらに有力になり、碑文と亀趺のあるブグト遺蹟やオング遺蹟の被記念者は可汗クラスの実力者であったかどうかの検証が必要となる一方、キュリ=チオル碑文は何かの石の再利用かもしれないとの疑いも出てこよう。チヨイル碑文が石人の再利用であることも想起すべし。

5時10分、あまりの寒さに作業を切り上げる。

## 9月15日(月)～19日(金) ウランバートル

この一週間は、メンバー全員が歴史研究所で碑文のテキストの仕上げ作業。先週決めた予定の通り、それぞれの仕事を分担。必要に応じて研究所の倉庫からタリアト・テス碑文の原物を取り出してチェックする。ハードワークの連続だった。

## 9月20日(土) ウランバートル→大阪

午前6時半頃、グランド=ホテルをあとにし、空港へ向かう。まだ真っ暗。

9時過ぎ、モンゴル航空903便が定刻より少し遅れて離陸。

午後1時頃、無事に関西国際空港に着陸。森安の高度計はマイナス15mを指していた。帰国後、この高度計の数値はマイナス30mからプラス70mの間を揺れ動いた。